

シリア中部、ビシュリ山系北麓青銅器時代 ケルン墓群出土の青銅製短剣の年代について

足立 拓朗・藤井 純夫

Dating of a Dagger from a Bronze Age Cairn Field in the Northwestern Flank of
Mt. Bishri, Central Syria

Takuro ADACHI and Sumio FUJII

キーワード：シリア、青銅器時代、トール・ラフーム、短剣、マルトゥ／アムッル

Key-words: Syria, Bronze Age, Tor Rahum, dagger, Mar-tu/Amurru

1. はじめに

平成 17 年度発足の特定領域研究「セム系部族社会の形成－ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究－」（研究代表者：大沼克彦、国土舘大学教授）は、「部族制」をキーワードに様々な調査・研究を展開してきた。筆者らが担当しているのは、ビシュリ山系北麓に分布する青銅器時代ケルン墓群の調査である（図 1）。本稿の執筆時点

（2009 年 10 月）までに、計 7 回の調査を実施している（藤井 2005, 2009; 藤井・足立 2007; Fujii 2008, 2009; Fujii et al. 2009a, 2009b; 足立 2008）。その前半は、ヘダージェ（Hedaja）＝ケルン墓群の調査に専念した。その結果、1）この地域のケルン墓群は、中期青銅器時代前半の数百年間に短期的かつ集中的に造営されたこと、2）それらは 3 時期に区分できること、3）大型の遊牧集団が関わっていた

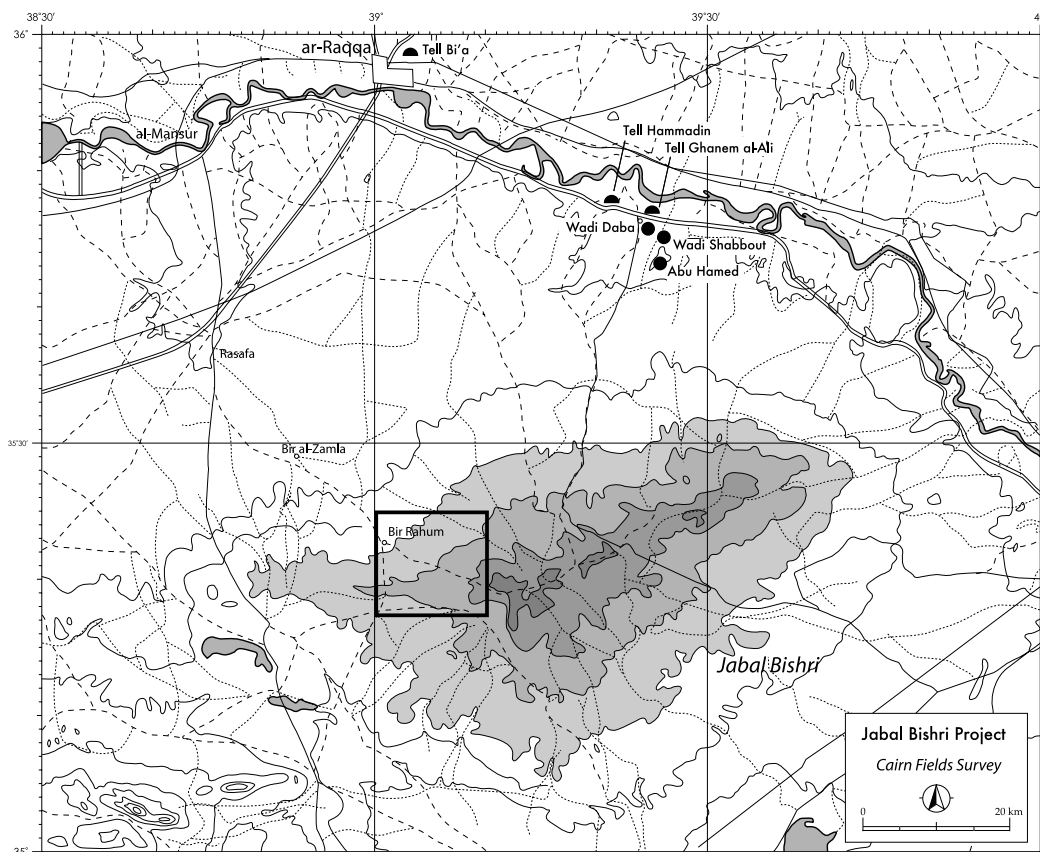


図 1 ユーフラテス中流域とビシュリ山系（太枠内が調査区域）

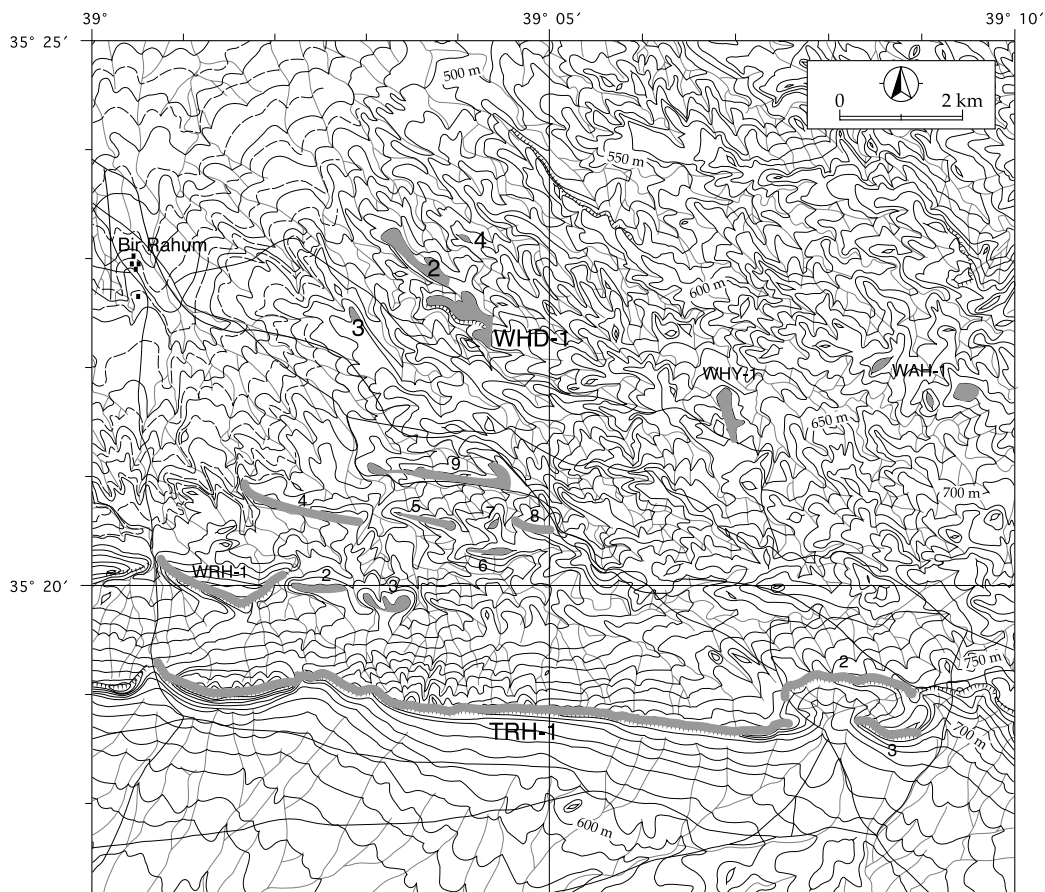


図2 ビシュリ山系北麓ケルン墓群の分布 (WHD: ワディ・ヘダージェ=ケルン墓群、WRH: ワディ・ラフーム=ケルン墓群、TRH: トール・ラフーム=ケルン墓群、WHY: ワディ・ハイユーズ=ケルン墓群、WAH: ワディ・アフマル=ケルン墓群)

こと、などの所見を得ることができた。なお、中期青銅器時代前半という年代観は、ヘダージェ1=ケルン墓群9号墓出土の青銅製トグル・ピンの考察から得られたものである(足立2008:9)。この9号墓はヘダージェ編年(藤井・足立2009; 藤井2009)のPhase 2初頭に位置づけられるので、ビシュリ山系北麓のケルン墓群は、全体として、前期青銅器時代末から中期青銅器時代に位置づけられるであろう。貝製品(足立・藤井2009)や石製・ファイアンス製ビーズ(足立・藤井2010)の考察からも、同様の年代観を得ている。従って、ビシュリ山系北麓の青銅器時代ケルン墓群は、シュメールやアッカドの粘土板文書に記載された最初期のセム系集団マルトゥ(Mar-tu)またはアムッル(Amurru)の墓域ということになろう。というのが、これまでに得られている展望である。

本稿では、第5次調査、すなわちトール・ラフーム1(Tor Rahum 1)=ケルン墓群の発掘調査で出土した青銅製短剣に着目して、上記の年代問題を再検討する。最初に、同遺物の出土状況、法量、型式などについて、概要を述べる(2章)。次に、ユーフラテス中流域の青銅器時代遺跡

群から出土した青銅製短剣とこの資料とを比較検討する(3章)。その上で、より広い文脈の中での比較を試みる(4章)。これらの作業を通して、上記青銅製短剣の年代を絞り込みたい。それは、ビシュリ山系北麓ケルン墓群全体の年代観を再査定することでもある。

2. トール・ラフーム1=ケルン墓群131号墓出土の青銅製短剣

第7次調査までに発掘したのは、ヘダージェ=ケルン墓群、トール・ラフーム=ケルン墓群、ワディ・ジャール・アッ・トュール(Wadi Jal-at-Tyur)=ケルン墓群、ワディ・ハイユーズ(Wadi Hayuz)=ケルン墓群、の4群である。(図2)(藤井・足立2009)。このうち、トール・ラフームでは3件のケルン墓群が確認されており、トール・ラフーム1~3=ケルン墓群と命名されている。本稿で扱うのは、2009年3月に発掘したトール・ラフーム1=ケルン墓群である。

同ケルン墓群では、計84件のケルン墓が確認されている。発掘調査は、このうちの一部(116号ケルン墓から

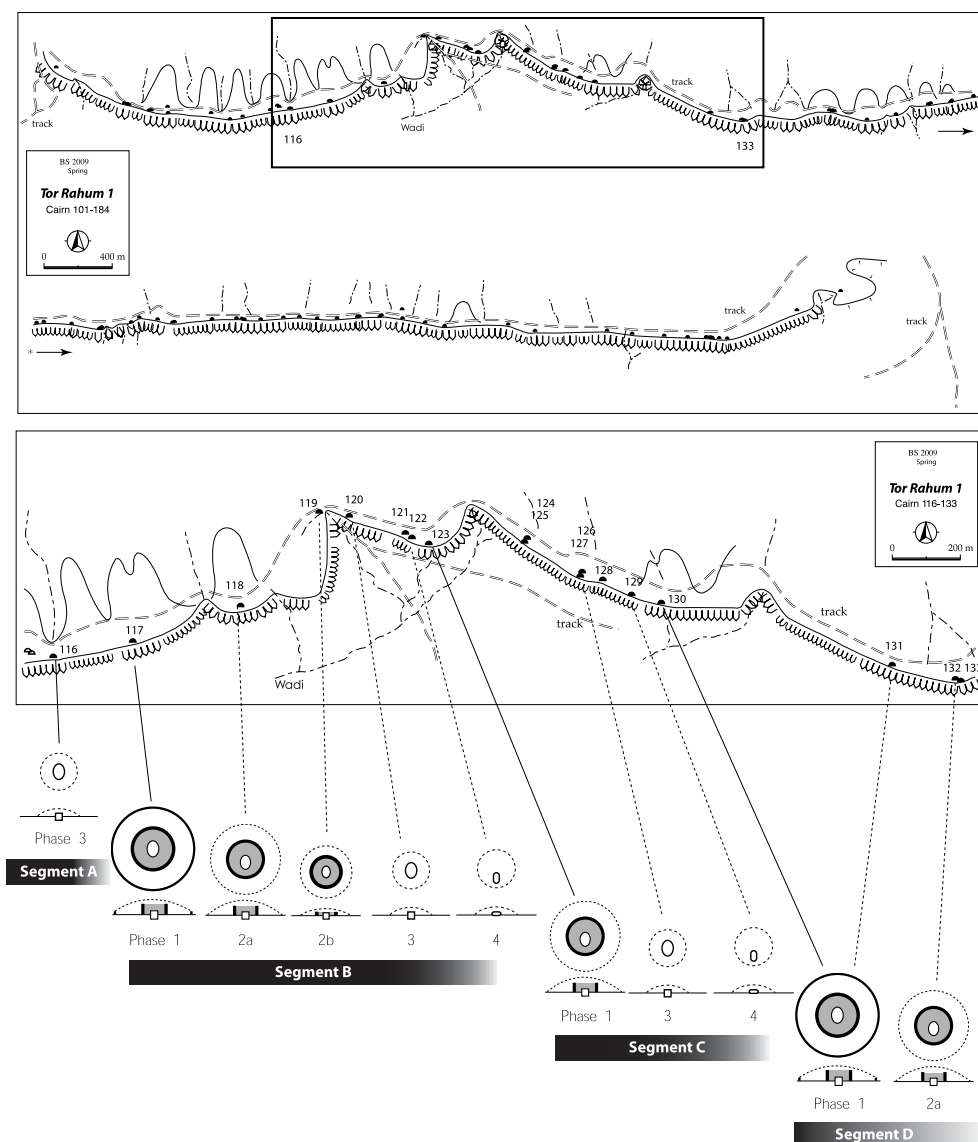


図3 トール・ラフーム1=ケルン墓群 (116号～133号墓)

133号ケルン墓までの約2.5キロ分)に絞って実施した(図3)。その結果、1)直線的に並ぶ数十件のケルン墓群が、実は数本の同時代ケルン墓列によって構成されていること、2)各ケルン墓列は10基前後のケルン墓から成り、ヘダージェ編年で言うPhase1～3のケルン墓で構成されていること、3)ただし、ヘダージェ編年に後続する4期のケルン墓も認められること、が判明した(藤井・足立2009)。

短剣は、線分D(Segment D)の131号墓から出土した。このケルン墓は周壁を伴うという点で、ヘダージェ編年のPhase1に位置づけられる(図4)。短剣が出土したのは周壁と主体部の間の回廊部分で、ほぼ原位置を保っていた。しかも、鞘を伴っていた(図5)。鞘は基部を欠損していたが、短剣はほぼ完形である。柄部と連結させるための鉤も、一つ残存していた(図6、7)。

短剣は有茎式で、長さ20.7cm、幅4.4cm、厚さ0.5cm、重さ72.2gであった。柄は出土してない。本資料の最大の特徴は、身部尖端・茎部とも三角形状を呈することである。また、身部中央には緩やかな鑄があり、全体に薄い造りとなっている。身部の両面に槌状の条線が認められるが、非常に浅く、不鮮明である。これらの条線は、本来ならば鑄の左右に対称的に配されるべきものであろう。その意味で、本資料はやや粗い造りと言える。一方、茎部は全体として三角形状を呈しているが、末端部は尖っていないので、より正確には不整形台状と言うべきかも知れない。鉤を装着するための孔が3つあり、下端の孔に鉤(長さ0.9cm、両端部の径0.3cm、中央部の径0.2cm)が残っている。鉤の長さから見て、本短剣の柄部は比較的薄手であったことがわかる。

一方の鞘(より正確には、鞘のカバー部分)は、残存長

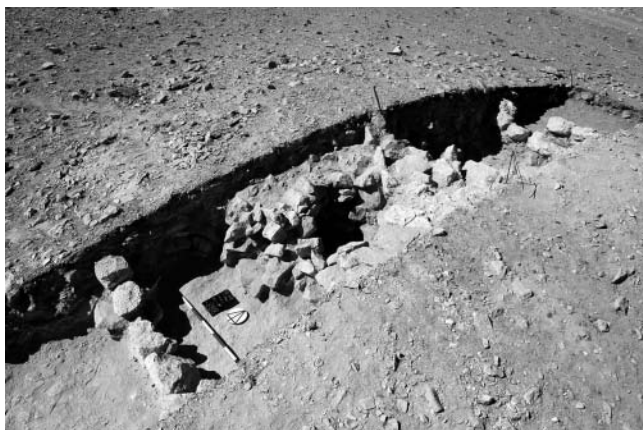


図4 131号墓：全景（南東から）



図5 131号墓：青銅製短剣と鞘の出土状況

11.7cm (3.1cm、8.6cm)、最大幅3.8cmで、伴出した短剣の身部先端とはほぼ相似形を呈している。従って、短剣と鞘がセット関係にあるのは確実である。しかし、両者は約15cmほど離れて出土したので、副葬時点で鞘に短剣が挿入されていたかどうかは不明である。なお、鞘カバーの縁の部分には、打ち出しによる列点文が施されていた。列点は、身部で1列、基部では2列であった（図7）。

131号墓出土の青銅製短剣は、その形態から、西アジアの前期～中期青銅器時代に典型的な「鋌留め有茎式短剣 (Tanged Dagger with Rivets)」の一つと定義し得る。後期青銅器時代以降の有柄式青銅剣（山本 1982; Adachi 2002）とは明確に区別できるので、上記の年代観はほぼ確定的と言える。従って問題は、そこからさらにどの程度絞り込めるか、である。次章以降、この点について検討する。

3. 周辺遺跡との比較

まず、ビシュリ山系北麓ケルン墓群に最も近いアブ・ハマド遺跡から検討してみよう（図1）。この遺跡はビシュリ台地縁辺の墓地遺跡で、前期青銅器時代の末（前2300

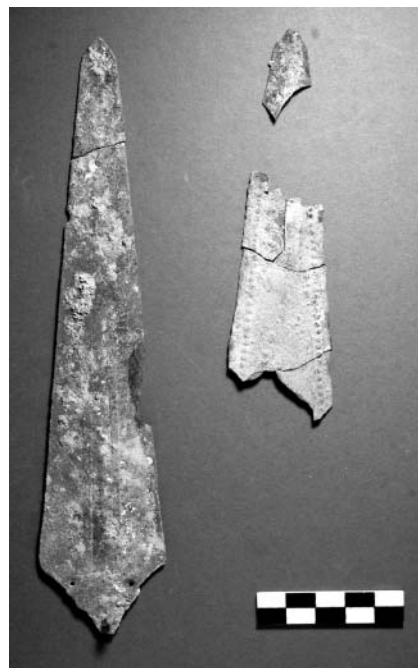


図6 131号墓：青銅短剣（左）と鞘（右）

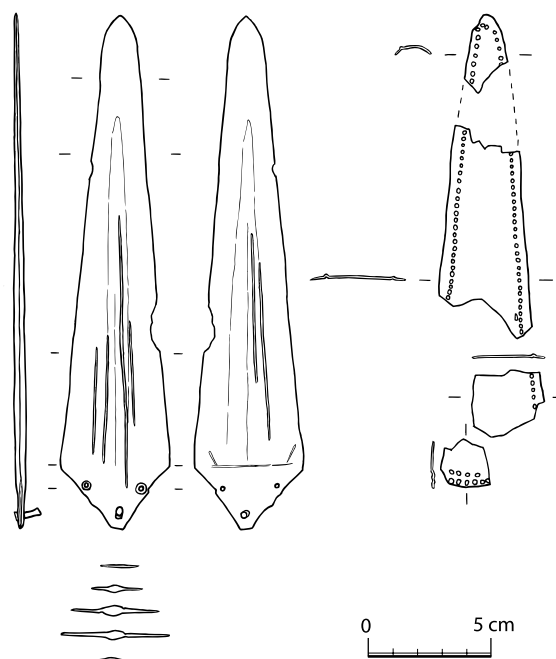


図7 131号墓：青銅短剣（左）と鞘（右）

年頃）に位置付けられている（Falb et al. 2005: 245）。7号墓から、青銅製の鋌留め有茎式短剣が1点出土している（図8: 1）。全長13.8cm、幅2.8cmで、131号墓出土例より小型の事例である（Falb et al. 2005: Tafel 46: 6）。身部先端は、131号墓出土例よりも鋭い。基部は破損しているが、二等辺三角形を呈し、全体に細身で、鑄や条線は造り出されていない。基部形状は一致するが、131号墓出土資料とは異なる特徴を有している。

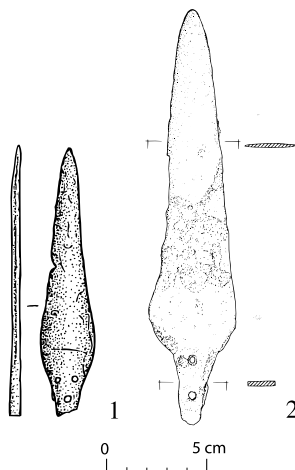


図8 周辺遺跡出土の青銅製短剣：アブ・ハマド遺跡(1)、テル・ムンバカ遺跡(2)

ラッカよりユーフラテス河を約 100km 遡ったテル・ムンバカ (Munbaqa) 遺跡では、前期青銅器時代の層から類例が 1 点出土している (図 8: 2)。長さ 22cm、幅 4.5cm、厚さ 0.3cm で、131 号墓出土例とほぼ同サイズである。ただし、茎部は舌状を呈し、鋌孔は二つである。鐔・条線は存在しない (Czichon und Werner 1998: Tafel 48: 89)。

続いて、ラッカ周辺で前期～中期青銅器時代の最大の都市遺跡であるテル・ピア (Bi'a) 遺跡の出土例を検討する。この遺跡では、前期青銅器時代後半から中期青銅器時代初頭までの墓が多数検出されている。この墓群は、1～7 期 (Gräber Gruppe 1-7) に区分されており、1～6 期が前期青銅器時代後半、7 期が前期～中期青銅器時代移行期に、それぞれ位置づけられている (Strommenger und Kohlmeyer 1998; Hempelmann 2002: Tabelle 2)。青銅製短剣は、1～6 期で出土している (図 9) (Strommenger und Kohlmeyer 1998: Tafel 219, 220)。1 期出土の 4 点の短剣は、茎部に三つの鋌孔を有しており、131 号墓出土例と類似する。ただし、茎部の形状が撥状を呈している点、鐔や条線が存在しない点は、131 号墓出土資料とは異なっている。2 期にも 2 点の鋌留め有茎式短剣が出土しているが、茎部はやはり舌状を呈しており、131 号墓出土資料とは異なっている。3 期には、鋌孔が二つの有茎式短剣が 1 点出土している。茎部はやはり舌状である。4 期には 5 点の有茎式短剣が出土しているが、鋌留め孔を有し、条線も観察できるのは 1 点のみである。5 点とも、茎部はやはり細長い舌状を呈する。5 期には、鋌留め孔を有しない青銅短剣が 1 点のみの出土している。茎部は細長い舌状を呈する。6 期には 5 点の短剣が出土しているが、やはり茎部は細長い舌状を呈し、身部と茎部の境は肩状を呈している。

まとめておこう。重要なのは、テル・ピア遺跡出土青銅

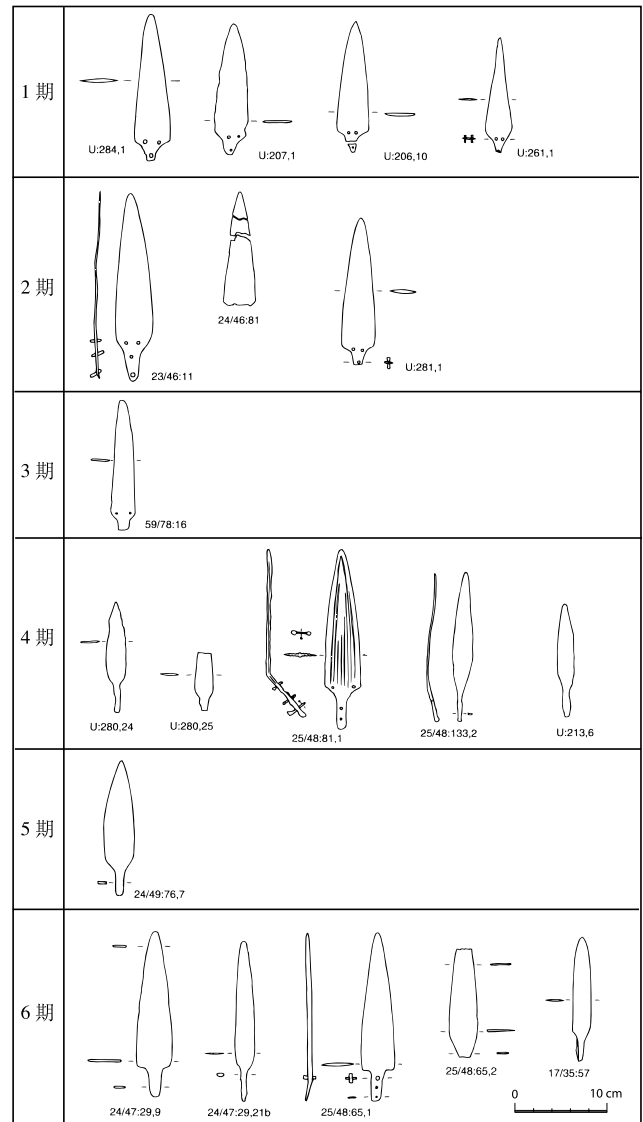


図9 周辺遺跡出土の青銅製短剣：テル・ピア遺跡 (Strommenger und Kohlmeyer 1998: Tafel 219 と Tafel 220 を加筆・統合)

短剣の型式変遷、特に（撥状から細長い舌状への）茎部の形態変化、である。テル・ムンバカ遺跡出土資料（前期青銅器時代）も茎部が舌状を呈しており、テル・ピア遺跡出土資料と形態的に一致している。従って、こうした事例（茎部舌状式の青銅短剣）は、ユーフラテス河中流域の前期青銅器時代後半の特徴と考えることができよう。逆に言うと、131 号墓出土例（茎部三角形の青銅短剣）はそれ以降の型式ということになる。なお、アブ・ハマド遺跡出土例（前 2300 年頃）はテル・ピア遺跡出土例と時期が重なるが、その形態は一致していない。この問題については次節で論じる。

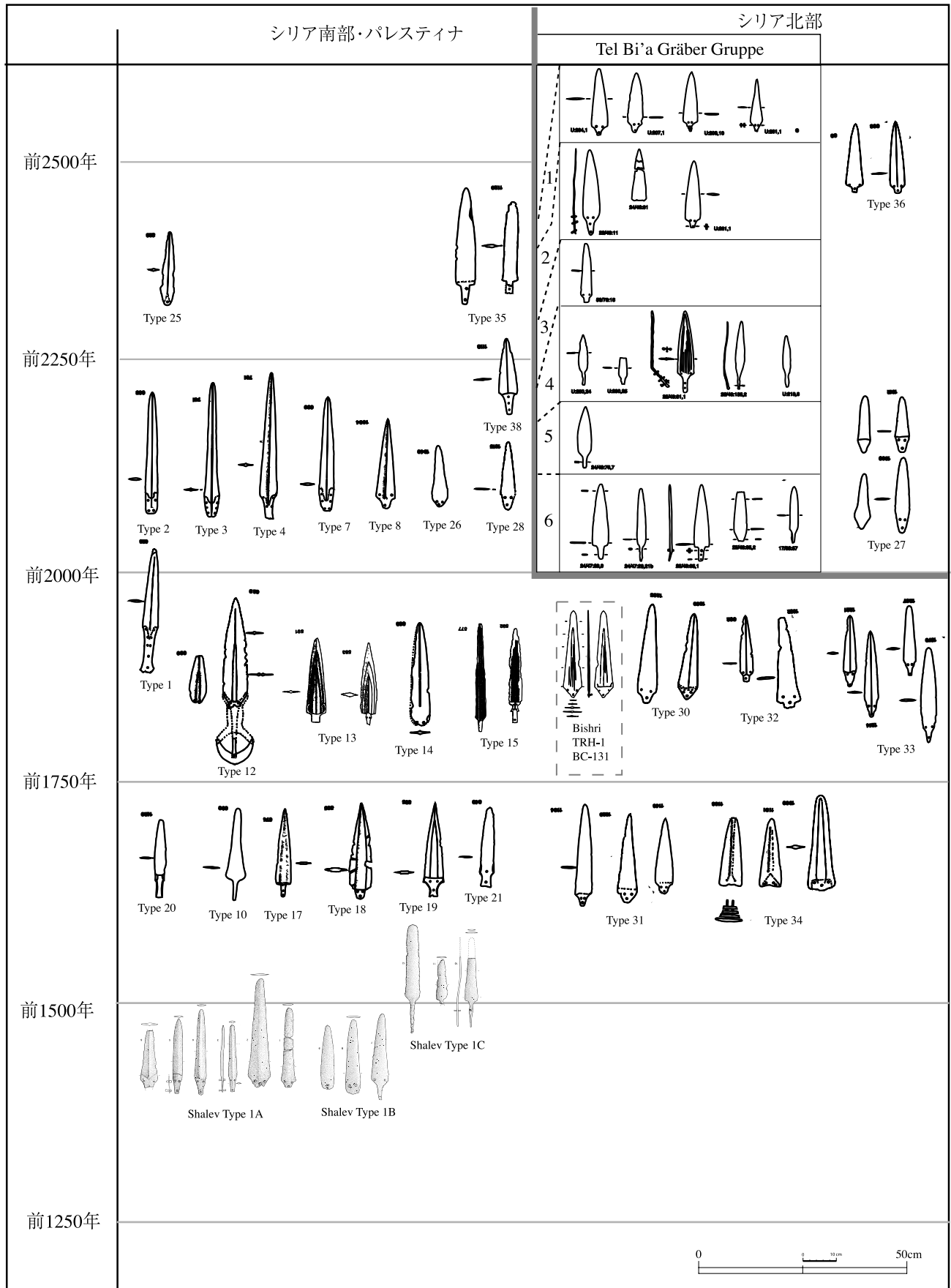


図10 シリア・パレスティナ地域出土の青銅製短剣の編年 (Philip 1989; Shalev 2004 を基に加筆・統合した)

	シリア							メソポタミア	
	西シリア	エブラ	ハマ	ユーフラテス中流域	ビシュリ	テル・ビア	レイラン	ジャジーラ	メソポタミア
前2500年	EB IIIb			Phase 4		Schicht 15-21 KK1		EJ IIIb	初期王朝 IIIb
			K		アブ・ハマド	Gräber Gruppe 1 Schicht 11-14 Gräber Gruppe 2			
	EB IVa	Mardikh IIB 1		Phase 5		Gräber Gruppe 3 Schicht 5-10 KK2	II	EJ IVa	アッカド
						Gräber Gruppe 4 Gräber Gruppe 5 Gräber Gruppe 6		EJ IVb	
	EB IVb (EB-MB)	Mardikh IIB 2	J 6-8			Gräber Gruppe 7 KK3		EJ V	ウル III
			J 1-5	Phase 6					
前2000年	MB I				Phase 1 Phase 2	Younger Palace early KK4-7			イシン・ラルサ
		Mardikh IIIA	H 5		Phase 3		I		
			H 4		Phase 4	Younger Palace late KK7			
	MB II		H 3						古巴バビロニア
		Mardikh IIIB	H 2 H 5						
前1500年			G 2						
	LB I								カッシート

図 11 ビシュリ山系北麓ケルン墓群の編年（西シリア・エブラ: Akkermans and Schwartz 2003; ユーフラテス中流域: Cooper 2006; テル・ビア: Einwag 1998, Hemplemann 2000, Pons 2001; ジャジーラ: Lebeau 2000; アブ・ハマド: Falb et al. 2005; ハマ: Riis and Buhl 2007; レイラン: Weiss 1990 を基に加筆・統合した。）

4. シリア・パレスティナの類例

次に、シリア・パレスティナ地域全域における前期～後期青銅器時代青銅短剣の研究（Philip 1989; Shalev 2004）を参照しながら、131 号墓出土資料の年代を再検討してみよう。フィリップは、同地域の短剣を 39 の型式に分類し、その中で前 3 千年紀のシリアにのみ分布する短剣を 27、29、36 型とした（Philip 1989: 102-140）。フィリップ分類を編年図として配置し、テル・ビア遺跡の変遷図（図 9）と合成したのが図 10 である。この図から、シリア・パレスティナ地域では様々な形状の有茎式短剣が製作されてい

たことがわかる。

しかしながら、131 号墓出土例のような三角形の茎部を持ち、身部に条線を持つ類例は存在しない。三角形の茎部を持つものは、前 3 千年紀第 4 四半期～前 2 千年紀前半の間にのみ存在する。テル・ビア遺跡 1 期出土例のような、三角形に近い撥形（concave triangular）の茎部を持つ類例はさらに古い時期に見られる。

三角形の茎部を持つ資料に注目し、法量そして身部と茎部のバランスによって判断すると、前 3 千年紀第 4 四半期の資料は 131 号墓出土例と一致しないようである。同時期

の資料は131号墓出土例より小型で、茎部の割合も大きい。アブ・ハマド出土資料はこの型式(27型)に分類されるべきであろう。そして、より大型で身部の割合が大きな131号墓出土資料は前2千年紀前半に位置づけるのが妥当であろう。

茎部の形状、茎部と身部のバランス、そして鐙の存在などから、131号墓出土資料に該当するのはフィリップ分類の30型である。さらに図示はされていないものの、この30型は身部に条線を持つことを特徴とされており(Philip 1989:106)、本出土例と一致している。フィリップはこの30型がビブロス遺跡の中期青銅器時代I期で一括資料として出土していること(Dunand 1954)、また中期青銅器時代I期の武器の身部に条線を持つ例が多いことを根拠に、同期の典型的な型式と指摘している(Philip 1989:106)。ただし、三角形の茎部を持つ類例ではないが、テル・ピア遺跡4期出土資料(前3千年紀後半)にも、条線を有する資料が含まれていることは見逃せない。また、フィリップが30型としている類例には、ハラワ(Halawa)遺跡H-70墓出土例(Orthmann 1981: Tafel 63:38)、タウィ(Tawi)遺跡T-64墓出土例(Kampschulte and Orthmann 1984: Tafel 31B:3)のように、前期青銅器時代後半に位置づけられるものも含まれている。これらのことから、131号出土青銅製短剣は中期青銅器時代I期およびその前後の時期に位置づけられる。というのが、当面の結論である。

5. まとめ

ビシュリ山系北麓トール・ラフーム1=ケルン墓群131号墓から出土した鋳留め有茎式短剣と鞘カバーについて記述し、比較型式学に基づく年代決定を試みた。その結果、これまでの研究とも一致する年代観を得ることができた(藤井2005, 2009; 藤井・足立2007, 2009; Fujii 2008, 2009; Fujii et al. 2009a, 2009b; 足立2008)。131号墓はヘダージェ編年のPhase 1に位置づけられることから、図11のような編年案を提示することができるであろう。今後は放射性炭素年代測定などのデータを加味しながら、より精度の高い年代観を追求していきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、木内智康氏の収集した文献を利用させていただいた。また、古代オリエント博物館および津本英利氏からも、文献を借用させていただいた。記してお礼申し上げます。

参考文献

- 足立拓朗 2008「ヘダージェ1=ケルン墓群出土の青銅製品」『Newsletter セム系部族社会の形成』11号 7-13頁。
足立拓朗・藤井純夫 2009「ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群出土の貝製品の年代について」『Newsletter セム系部族社会の

形成』15号 1-6頁。

足立拓朗・藤井純夫 2010「東シリア、ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群出土の石製・ファイアンス製ビーズの年代について」『オリエント』52/2 (印刷中)。

久米正吾・沼本宏俊 2009「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」『Newsletter セム系部族社会の形成』14号 11-19頁。

藤井純夫 2005「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『Newsletter セム系部族社会の形成』1号 6頁。

藤井純夫 2006「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『Newsletter セム系部族社会の形成』2号 5-7頁。

藤井純夫 2009「計画研究班「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」」大沼克彦編『セム系部族社会の形成平成19年度研究成果報告』30-35頁。

藤井純夫・足立拓朗 2007「2007年度ビシュリ山系北麓ケルン墓サーベイ」『Newsletter セム系部族社会の形成』7号 1-5頁。

藤井純夫・足立拓朗 2009「ビシュリ山系北麓ケルン墓群の第一次～第三次発掘調査」『Newsletter セム系部族社会の形成』14号 6-10頁。

山本忠尚 1982「西北イラン出土の青銅製短剣についてールリスタン青銅器の一側面」『考古学論考』1087-1115頁 平凡社。

Adachi, T. 2002 The Development of the 'Ear' Pommel Sword in Northwestern Iran. *Bulletin of the Okayama Orient Museum* 19: 23-37.

Akkermans, P. M. M. G. and G. M. Schwartz 2003 *The Archaeology of Syria: From Complex Hunter-Gatherers to Early Urban Societies (ca. 16,000-300 BC)*. Cambridge, Cambridge University Press.

Cooper, L. 2006 *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. New York: Routledge.

Czichon, R. M. und P. Werner 1998 *Tall Munbaqa-Ekalte I: Die Bronzezeitlichen Kleinfunde*. Saarbrücken, Saarbrücker Druckerei und Verlag.

Dunand, M. 1954 *Fouilles de Byblos 1933-1938*, Tom II. Paris, Paul Geuthner.

Einwag, B. 1988 *Die Keramik aus dem Bereich des Palastes A in Tall Bi'a/Tuttul und das Problem der frühen Mittleren Bronzezeit*. Munich, Profil.

Falb, C., K. Krasnik, J.-W. Meyer and E. Vila 2005 *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im Syrischen Euphrattal. 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarbrücken, Saarbrücker Druckerei und Verlag.

Fujii, S. 2008 The General Survey of Pre-Islamic Burial Cairns in the Northern Flank of Jabal Bishri. In K. Ohnuma and A. Al-Khabur (eds.), *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Second Working Season. Al-Rafidan* 29: 136-138.

Fujii, S. 2009 A Brief Sounding at Rujum Hedaja 1. In al-Maqdissi and Ohnuma (eds.), 139-142.

Fujii, S., T. Adachi and K. Suzuki 2009a The Second Field Season at Rujum Hedaja 1. In al-Maqdissi and Ohnuma (eds.), 180-187.

Fujii, S., T. Adachi and K. Suzuki 2009b The Soundings of the Hedaja Cairn Field, the Northwestern Flank of Jebel Bishri. In al-Maqdissi and Ohnuma (eds.), 216-223.

Hempelmann, R. 2000 Frühbronzezeitliche Keramik aus Kharab Sayyar und Tell Chuera. *MDOG* 134: 285-309.

Kampschulte, I. and W. Orthmann 1984 *Gräber des 3 Jahrtausends v Chr im Syrischen Euphrattal, 1. Ausgrabungen bei Tawi 1975 und 1978*. Bonn, Säärbrucker Beiträge zur Altertumskunde.

Lebeau, M. 2000 Stratified Archaeological Evidence and Compared Periodizations in the Syrian Jezirah during the Third Millennium B.C.

- In C. Marro and H. Hauptmann (eds.), *Chronologies des pays du caucase et de l'Euphrate aux IVe-IIIe Millénaires*, Actes du Colloque d'Istanbul, 16-19 Décembre 1998, 167-192. Paris, De Boccard.
- al-Maqdissi, M. and K. Ohnuma (eds.) 2009 Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological Joint Research in the Region of ar-Raqqa, Syria, 2008. *Al-Rafidan* 30: 135-225.
- Maxwell-Hyslop, K. R. 1971 *Western Asiatic Jewellery c.3000-612 B.C.* London, Methuen.
- Orthmann, W. 1981 *Halawa 1977-79. Vorläufiger Bericht über die 1. bis 3. Grabungskampagne*. Bonn, Särbrucker Beiträge zur Altertumskunde.
- Pons, N. 2001 La poterie de tell Amarna (Syrie) au BA IV et BM I: Première approche et corrélation avec quelques sites clés. *Akkadica* 121: 23-75.
- Philip, G. 1989 *Metal Weapons of the Early and Middle Bronze Ages in Syria-Palestine*. BAR International Series 526 i,ii, Oxford, B.A.R.
- Riis, P. J. and M.-L. Buhl 2007 *Hama: Fouilles et recherches de la fondation carlsberg 1931-1938, I 2, Bronze Age Graves in Hama and Neighbourhood*. Copenhagen, Nationalmuseet.
- Shalev, S. 2004 *Swords and Daggers in Late Bronze Age*. Prähistorische Bronzefunde. Stuttgart, Franz Steiner Verlag.
- Strommenger, E. und K. Kohlmeyer 1998 *Tall Bi'a/ Tuttul - I: Die Altorientalischen Bestattungen*. Saarbrücken, Saarbrücker Druckerei und Verlag.
- Weiss, H. 1990 "Civilizing" the Habur Plains: Mid-Third Millennium State Formation at Tell Leilan. In P. Matthiae, M. van Loon and H. Weiss (eds.), *Resurrecting the Past: a Joint Tribute to Adnan Bounni*, 387-407. Istanbul, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut.

足立 拓朗

中近東文化センター

Takuro ADACHI

The Middle Eastern Culture Center in Japan

藤井 純夫

金沢大学人文学類

Sumio FUJII

Faculty of Humanities, Kanazawa University